

令和6年度 大阪府立牧野高等学校 第3回学校運営協議会 議事録

日時 令和7年2月12日(水) 15:00~16:10

場所 大阪府立牧野高等学校 校長室

出席者(敬称略)

協議会委員 松宮 新吾(会長)、有堀 正彦(副会長)、森 隆裕、
辻本 智子

【欠席】 薙井 順子、尾崎 由美

学校長 高松 智

事務局 川村 大作、大道 香央利、中務 正和、清原 一輝

1. 開会

① 会長挨拶

皆さまこんにちは。お忙しい中ありがとうございます。本日は第3回の学校運営協議会ということで、前回、令和6年度の学校経営計画及び学校評価の進捗状況の中間報告を受けましたが、今回は、その最終の報告を受けます。その報告に基づき、令和7年度の学校経営計画及び学校評価についてご説明いただき、委員の皆様にはそれらをご承認していただくことになろうかと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

② 校長挨拶

皆さまこんにちは。本日はありがとうございます。

さて、2月7日に公立中学校校長会から第3回進路希望調査が公表されました。それを見ますと、多くの府立高校で定員割れが起きています。本校は幸い定員を超え、1.18倍になっていますが、今年度行いました生徒主体の学校説明会が良かったのではないかと考えています。また、昨年末の総合教育会議で知事から令和9年度までに全府立高校で海外の高校と姉妹校提携をするという方針が出されました。さらに令和10年度入試から入学者選抜方法が大きく変わるということも発表されました。入試日を早くし、アドミッションポリシー枠を設けるといったようなことです。詳細は今後発表されていきますが、こうした施策が公立高校の志願者にどのような影響をもたらすのか、まだ予測できないところがあります。しかし、本校においては、これまで培ってきたよき伝統を受け継ぎ、時代が変わっても中学生に選ばれる学校にしたいと思っています。そのため、皆様からのお知恵をお借りして学校運営をしていきたいと考えていますので、忌憚のないご意見を頂戴できればと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

2. 令和6年度学校経営計画及び学校評価(案)について・・・学校長より説明

3. 令和7年度学校経営計画及び学校評価(素案)について・・・学校長より説明

- 委員・・・今年度は全体的に学校教育自己診断の肯定的回答の数値が下がったとのことだが、その要因として何か本質的な課題みたいなものがあるのか。次年度の目標設定とも関係してくると思うが、その課題がわかれば何をすべきかが見えてくるように思うが、いかがか。
- 校長・・・新しい学習指導要領になり、新たな科目が出てきた。社会科では世界史と日本史を融合した歴史総合といった科目、理科については物理基礎、化学基礎といった基礎科目と物理、化学といった従来からある科目に分かれた。また情報という科

目も新しく入ってきて、大学入学共通テストがこれまでと大きく変わった。数値が下がった要因は、どのような問題が出題されるかよくわからない中で生徒の不安が強かったことがあるのではないかと考えている。教育産業も予想問題などを発表しているが、やはり実際の問題を見ないと出題傾向はわからないこともあり、生徒は不安感が強くなったのではないか。これを課題と考えるのであれば、先月、大学入学共通テストがあったが、あと2・3年しないと出題傾向ははっきり見えてこないで、生徒が不安を感じなくなるまで、あと2・3年かかるのではないかと考えている。

- 委員・・・内部要因より外的な要因により不安感が増しているということか。
- 校長・・・はい。
- 委員・・・「牧野高校の授業はわかりやすい」の肯定的回答は下がっているが、「非常にそう思う」の項目は増えている。これは授業の理解度の二極化が進んでいるということかと思うので、やはり何らかの対策はしていく必要があると思う。
- 校長・・・学期の終わりごとに成績会議があり、そこでの報告を聞くと、各学年とも、勉強のできる生徒とできない生徒の差が結構あるように思う。勉強に意欲的な生徒は自ら先生に質問に行ったりしているが、そうでない生徒もおり、課題を出したり放課後の質問会等により全体のボトムアップをしていく必要があるように思う。
- 委員・・・学習活動、行事、部活動等多岐にわたり先生方は教育活動に関わっておられるが、かなり負担も増えているのではないかと思う。データベース化やペーパーレス化による会議時間の縮小、部活動時間の圧縮、校内行事の見直し等工夫されているが、実際に月の残業時間が80時間、100時間を超える教職員はどれくらいいるのか。
- 校長・・・資料7を見ると、80時間超、100時間超の教職員はそれぞれ35人、20人と書いているが、これは延べ人数であり、実際は5～6人の先生である。これらの先生方が毎月の時間外が多くなっている。一方、時間外勤務が多くない先生方も一定数おられる。
- 委員・・・教職員のウェルビーイングというか疲弊しないようなサポートは何かされているのか。
- 校長・・・部活動については部活動指導員という外部の方を非常勤職員として雇用し部活動指導や大会引率をしていただいている。今年度硬式テニス部に1人、新たにに来ていただいた。ただ、各学校で取り合いとなっており、予算のこともあり希望通り配置されない面がある。
- 委員・・・「牧野高校は悩みを相談できる人や部屋がある」という数値が下がっているのが気になる。要望であるが、数値目標も大事だが、具体的にどういうことをされているのか、検討いただいて数値をあげていただきたいと思う。
- 会長・・・経年的にポイントを比較していく中で、学校教育自己診断について統計的な検定はされているのか。ポイントが上がった、下がったということで一喜一憂するのではなく、検定をして、有意差があるかどうか確認をするということ。82%と78%なら有意差はほとんどなく誤差の範囲であると捉えることができる。差が7ポイント、8ポイント、10ポイントに近い数字が出てくると、集団が質的に少し変わってきているという判定ができる。おそらく表計算ソフトを使っておられると思うので数学に詳しい方なら簡単に検定できる。パッケージに数値を入れるとすぐに検定結果が出る。そうすると、ポイントに捉われるよりもっと大きなところが見えてくるのかなと思う。

授業の満足度や理解度のところで、学力は正規分布になるという仮説を立て、それに平均点を合わせると数学的には68%の児童・生徒を対象とした授業ができる。しかし、令和6年度の全国学力・学習状況調査を見ると、正規分布どころか、ふたコブでもなく、多極化している、いわゆるギザギザのグラフになる。それに平均点を合わせると、25%から30%の児童・生徒しかカバーできないことが明らかになった。一斉学習、一斉授業は、かつての正規分布なら、1クラス50人なら50人、40人なら40人が正規分布すると考えるから、平均に合わせた授業を展開すれば、理解が進むだろうという仮説のもとで授業が成立していた。ところが今は、高校入試を経て、学力が比較的そろっている牧野高校においても、かなり多極化している。だからそれに対応できるよう国の言う個別最適化の学びを意識した取り組みが求められてくる。今日お話を伺って、思ったことは、ポイントの変化を必ず検定され、有意差があるのなら、そこを重点的に施策するということが求められてくるといったことである。ぜひ検定をされたい。学校教育自己診断の数値が上限まで達したのであれば、今後、それをどう維持し、どこを重点的に注力するかということがポイントになってくると思う。では、令和6年度の学校経営計画及び学校評価と、令和7年度の学校経営計画及び学校評価について、委員の皆様、了解いただいてよろしいか。

⇒ 令和6年度学校経営計画及び学校評価、令和7年度学校経営計画及び学校評価
ともに承認

- 委員・・・先ほどの正規分布にならないという話だが、学力試験を受けて一定の学力がある生徒が入ってくる牧野高校のような学校でも多極化というか学力が分散するものなのか。
- 会長・・・一定の学力がある集団でも正規分布しないというのが、今の現状。国の調査では35人学級で8%の生徒が学習に課題があると言われている。全国レベルで発達障がいも何%といった数字が出ている。牧野高校においても程度の差はあれ、いろいろな課題をかかえた生徒や特性のある生徒が在籍していると捉えておくのが基本。入試をクリアしたので、生徒の質は似ているが、一つのクラスで見ると多極化している。

4. 学校教育自己診断について・・・学校長より説明

今年度、多くの項目で前年度を下回っています。これまでは横ばいか少しアップしていることが多かったのですが、昨年度が上限のピークと考えました。ただ、極端に下がった項目はありません。学習指導、生徒指導、学校運営に関わる設問の数値は概ね7割から8割前半で推移していますので、今後は80%を一つの基準にしたいと考えています。「授業の予習復習ができている、まずできている」の項目は50%前後でずっと横ばいですので、上昇できるように生徒に働きかけていきたいと考えています。

5. 第2回授業アンケートについて・・・学校長より説明

一番上段が年代別アンケート結果の推移です。その下が教科別のアンケート結果の推移です。いずれも右から左に経年変化を表しています。下のグラフはそれらを折れ線グラフで表しています。下のグラフも右から左へと経年で表しています。

授業アンケートについて、説明いたします。資料6-2をご覧ください。資料6-2をもとに、生徒たちが全教科の担当教員について質問項目それぞれについて、4点を満点として回答したものをまとめたものです。12月の第2回の本協議会で、非常勤講師を除き、昨年度は第1回の平均が3.45、第2回の平均が3.51、今年度第1回は3.43と、昨年度の第2回よりは下がったものの、第1回と0.02ポイントしか変わらないということで高止まりしたということをお話いたしました。今年度第2回の平均が3.48となり、第1回を上回りました。

資料6-1の上の表をご覧ください。年代別に見ますと、どの年代も今年度第1回より第2回の方で数値が上がっていることがわかります。0.05ポイント以上、上昇したところは、赤く塗った矢印にしています。どの年代も学校が設定した目標値である3.40以上あり、年代を問わず、多くの先生がわかりやすい授業を心がけておられることが、その要因のように思います。その下の教科別についても、情報を除き、同じか第1回よりも第2回の方が数値が上がっています。情報は今年度実施の大学入学共通テストより入試科目になったことから、生徒の意識が座学の教科とらえていることがその背景にあると思います。そうした中でも、本校の目標値の3.40を超えており、年齢別平均、教科別平均の差も、第2回が第1回より小さくなって、教科や年齢による授業のわかりやすさの差が少なくなっています。今回3.48という結果でしたが、これより数値を上げることは、難しいと考えています。今後は3.40以上維持することを目標に3.45から3.50あたりを上限値としていければと考えています。前回もお話させていただきましたが、授業をうまくなる一番の近道は、人の授業を見る、自分の授業を見てもらうことと思っていますので、今年度管理職による授業観察時に、先生方も見に来て下さいと声かけをしましたところ、何人かの先生が他の先生の授業を見に来てくれました。授業観察した後、私から全ての先生に授業の感想や改善点などを返しています。こうした取り組みを続けながら、引き続き授業力向上に取り組んでいきたいと思っています。

授業アンケートは今回高評価となりましたが、中には残念ながら思うような数値が得られてない先生もおられます。そういう先生方に対して、助言を行うなどして全体のボトムアップに努めたいと思います

6. 職員超過勤務の推移について・・・学校長より説明

左が令和5年度のもの、右が令和6年度のもので、今年度は、コロナが完全に過去のものとなり、全ての学校行事等も含めた教育活動が、コロナ前の状況に戻りました。その結果、教員一人当たりの超過勤務時間が6月と、8月から11月について、昨年度より増えました。主な要因に考えられるのは、6月は体育祭や教育実習の指導、2学期なら文化祭の準備や学校説明会に係る生徒への指導、部活動の試合などがあげられます。80時間以上の面談対象者は前年度より減っています。今年度の時間外は、最終的に、前年度より2時間ほど増えるのではないかと予想しています。行事や部活動が盛んな本校としては、様々な方法で時間外勤務削減に向けての取り組みをしていますが、学校の力だけでは難しいところもあり、これ以上の削減に向けた取り組みは難しいと感じているところです。そこで来年度も今年度の時間外から3%削減を目標としました。この目標にしたのは、令和5年度並みの時間外勤務をまずはめざそうと考えて、6年度の3%削減が5年度とほぼ同じ時間外勤務になるということからです。本校の特色である学校行事や部活動についてその質を維持するためには、大幅な時間外削減をいきなり目標にするのは難しいと感じていますのでスモールステップで取り組んでいきたいと思っています。教育活動の質の維持と時間外勤務の削減の両立は、非常に難しい問題で、どの学校も苦勞していますが、わずかでも時間外勤務が減るように、教職員一人ひとりの意識づけに繋がる声掛けや部活動指導員の導入などに取り組んでいきたいと思っています。

7. 協議

- 会長・・・学校教育自己診断では、毎年のことだが、生徒と保護者との間でギャップが非常に大きい。特に「学校が楽しい」といった項目の第1評価のところ。唯一、一致しているのが体育祭、文化祭についてのところで保護者、生徒とも50%超が評価している。保護者に対する情報提供のあり方について、何か方策が取れないものかとも思う。「授業がわかりやすい」という設問について、子どもたちの第1評価は3割、8割近い子どもたちがわかりやすいとしているが、保護者はかなり厳しく、第1評価が低い。こうした点について、学校からの情報が十分伝わっていないのか、あるいは子どもの話から判断しておられるのか。保護者の立場からお聞きしたい。
- 委員・・・私はPTA役員なので学校からの情報はある程度入るが、高校生ともなれば学校のことは保護者にはほとんど話さない、聞いても答えないということがある。保護者は学校のことはわからない。知る機会がないので、こういう結果になると思う。そのために学校に何をしてほしいかといわれてもわからないが、情報発信をもう少し学校からあればと思うところはある。今年からメールマガジンでお知らせをいただいております、こうしたことを増やしていただければと思う。
- 会長・・・生徒、保護者、教員の意識がぴったり一致する必要はないが、第1評価のギャップがあまりに大きいので、ブログやSNSなどで学校が情報発信されるとそのギャップも少し埋まってくるのかもしれない。
- 委員・・・超過勤務のことだが、部活動の顧問が増える傾向にあるとのことだが、顧問の負担感はどうなものか。非常に負担を感じてされているのか、やりたくてされているのか。どちらが多いのか。
- 校長・・・本校は後者が多い。部活動指導を生きがいとしている方が、時間外勤務が多くなる。しかし本人は全然苦にしていない。月80時間、100時間以上の先生方もこうした方。産業医面談も行うが、しんどいという訴えはなく面談もすぐに終わる。そうした方は部活動指導ができない方がストレスを感じる。数字だけ見ると、時間外が増えてしまうのだが、本人は苦にしていない。だからと言ってそれでいいというわけではない。
- 委員・・・教育委員会から時間外を減らすように言われるので、時間外削減に向けた取組みをされていると思うが、そんな単純な問題でないようにも思う。今の話を聞くと、部活動指導が教員のワークライフバランスにあまり影響していないように思う。
- 校長・・・どのクラブも1週間の間に休養日を設けているので、部活動に熱心な先生もその日は早く帰っている。ただ、練習のある日や土日でも試合が結構あるので、そこで時間外が増えてしまう。
- 委員・・・「いじめについて困っていることがあれば真剣に対応してくれる」の「全く思わない」がこれまでの4%、3%から今年度は9%、特に3年生は11%と上昇している。教職員も2%から11%、11%と上昇している。ただ、保護者は非常に低い。ということは高校生になると、家で悩みとかを保護者に言っていないということになる。1割の生徒がいじめ対応について少し不安に思っているのが気になる。カウンセリングや教育相談体制はどうなっているのか。
- 校長・・・スクールカウンセラーは、いろんな学校を巡回されており、本校には月1回来られる。その時は、生徒だけでなく保護者の予約も結構入る。もう少し巡回回数を

増やしてほしいが、本校より重篤な生徒がいる学校が多いので、そうした学校への巡回が増えてしまう面がある。

- 委員・・・いじめを発見するための情報収集としてアンケートなどを行っているのか。
- 校長・・・年3回、いじめに関するアンケートをしている。誰がどのような回答したかわかるので、それを集約して聞き取りをした方がいいと判断した場合は、生徒を呼んで、聞き取りをする。ただ、なかなか話さない生徒もいるので、指導が進まないことがあるが、その場合も生徒の思いを最優先にし、無理に聞くことはせず、先生方には生徒の様子をよく見ておいてほしいとお願いしている。聞き取りが必要な生徒は多くなく、各学年に1人か2人程度である。
- 委員・・・「授業アンケート」の結果が素晴らしいが、高校になると教科の専門性が高まるので教科ごとの研修が中心になると思うが、学校全体で教科の枠を超えた例えば個別最適な学びとか協働的な学びとか、そのような視点で、授業を進めるために何か柱となるようなものを作られているのか。
- 校長・・・組織だったものは現在できていない。令和元年度と2年度に大阪府教育センターのパッケージ研修という授業力向上に係る研修に申し込み、2年にわたって全教員が受講した。その研修の効果が残っているものと思う。
- 委員・・・学校からの情報提供ということでは、校長先生からSNSで発信をすごくしていただいているが、保護者が積極的に見に行かないということがある。小中学校までは保護者も意識があるが、高校になると保護者も意識が下がっているところはある。発信していただくと保護者は見に行くので、発信を増やしていただければと思う。それと高校になると保護者に学校からのプリントが渡らないことが小中学校の時よりずっと増える。先ほどのスクールカウンセラーの話でいうと、スクールカウンセラーが来るということが保護者に届いていない。そういったことがアンケート結果につながっているように思う。
- 会長・・・難しいことだが、ぜひ情報が的確に保護者に伝わるようお願いしたい。スマホを使うのも一つの方法だが、スマホ依存とか発達障がいに関わるようなところまで最近の研究されているので、うまくバランスをとる必要がある。紙ベースもいいかもしれない。
- 会長・・・学校教育自己診断の「予習復習をしている」の第1評価が低いのが残念。小6と中3を対象とした全国調査で自分で学び方を工夫する、すなわち自己管理自己統制型の学習ができる子どもは成績が優に高いという結果が今回明確に出ている。自分で予習復習を工夫しながら自己管理ができる能力いわゆるPDCAが小学校低学年から徐々に育成していくことが求められている。子どもたち自身が、そうした能力を身につけ、それを発揮するようにすることが、国が求めている個別最適化の学びと考えると牧野高校の生徒たちの予習復習も一律のやり方ではなく、一人ひとりが自分で考え工夫するようになると「授業がわかりやすい」という項目にもプラスに作用するのではないかと思う。数字だけ見れば、予習復習の当たり前のところができていないということになるので、何か取組方法を考えていただければということを感じた。

8. 閉会・・・学校長よりお礼